

入選

親切のバトン

福井県 立待小学校 五年

久守 紗季

小さなころから、人にはやさしく、親切にしましようと、先生や親から言われてきました。だれかが泣いていたり、困っているときにやさしい言葉をかけたり、手助けしたりすることは、それほどむずかしくありません。

学校でも、友達にそうやってやさしくしたり、されたりすることはよくあります。でも、知らない人に親切にするのは、ちょっと勇気がいります。

このあいだ、コンビニエンスストアに行ったとき、わたしより先にお店に入ろうとしていた男の人がいました。その人は、先にお店に入って、次にわたしがお店に入るのに、ドアをあけて待っていてくれました。わたしは、ちょっとびっくりして、

「ありがとうございます。」

と言うと、男の人は少しわらってお店の中に入っていました。そのあと、なんだかうれしいようなあたたかい気持ちになりました。

家に帰って、お母さんにそのことを話すと、

「それはよかったね。親切でやさしい人だね。でも、その人にまた会って、親切のお返しをするのはむずかしいね。じゃあ、どうしたらいいと思う？」

と言われました。わたしは上手く答えられませんでした。お母さんに、

「もう会えないかもしれない人に、お返しするのは無理だと思う。」と言うと、

「そうだね。そういうときは、その親切を別のだれかにお返しのつもりでしてあげてね。そうすると、その別のだれかが、また別のだれかに親切のバトンをつないでくれるよ。そうやって親切の輪がひろがっていくと、みんながやさしくて、しあわせな気持ちになれるね。」と言いました。

しばらくして、家族でお買い物に行ったとき、前を歩いている家族づれがいましたが、お父さんにおんぶしてもらっている小さな男の子のくつが、足からはずれて落ちてしまいました。でも、その家族は気づかずに行ってしまいました。

わたしは最初、知らない人だしどうしようと思ったけれど、このあいだのお母さんの話を思い出して、勇気を出してくつをひろって、その家族づれに声をかけました。

「あの、くつ落ちました。」と言うと、

「ありがとう。たすかったよ。」

と、そのお父さんが、わらってお礼を言ってくれました。

少しはずかしくて、わらってくつをわたすのがせいっぱいだったけれど、親切のバトンがわたせて、とてもうれしい気持ちになりました。

親切は、したほうもされたほうも、しあわせな気持ちになれるので、これからも親切のバトンが広がっていくといいな、と思いました。